

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ワ族の木鼓と始祖夫婦

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大林, 太良 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00002286">https://doi.org/10.15021/00002286</a>

## ワ族の木鼓と始祖夫婦

大林 太良\*

中国とミャンマーとの国境に住むワ族は、東南アジア文化史の研究上重要な地位を占めている。彼らについては従来ほとんど研究されていなかったが、幸い近年、中国入学者が若干の有用な資料を発表したので、ワ族についての我われの知識は大きく改善された<sup>1)</sup>。

生ワ族のどの村にも聖域が一つある。聖域に人間の頭蓋骨が保管され、崇拜される。彼らの村は常に山の斜面に建てられ、聖域は村の上端にある。聖域は草葺きの小屋で、その中に一個の太鼓、あるいは相並んだ二つの木鼓がある。この聖域は事実上、彼らの祖先に対する祭壇である〔凌 1953:4；黄・葉 1958:67〕。サンヤン村（虚構の村名かも知れない）では、中央に広場があり、そこで牛類が供犠される。広場には草葺きの太鼓小屋がある。広場の別の側に何本かの柱が立っていて、それには人間の顔がげげげしい色で描かれてある。太鼓小屋は、旅人を泊めるところでなく、泊めるところは村の南端にある〔呉 1962:71-73〕。

スコットとハーディマンによると、ミャンマー側のワ族の太鼓小屋も、中国側のワ族と同様に、村の上端に建てられている。太鼓小屋は「精霊の家で、小さな建物で、まわりを杭の柵でかこまれ、粗雑に草を葺いてある〔Scott and Hardiman 1990:502〕。しかし、かつての国境地帯では、大きな太鼓は常に村の長の家に置かれている〔Scott and Hardiman 1990:506〕。

中国側のワ族の太鼓小屋では、ふつう二個の太鼓が相並んで置かれており、一方が他方よりも大きい。太鼓は材木で作られ、長さは1.5メートルから2メートル以上に及び、直径は約60センチメートルから約1メートルである。材木は掘りくぼめて大きな槽になっている〔凌 1953:4 および図版7；黄・葉 1958:67〕。若干のワ族の村では、太鼓小屋には太鼓は一つしかない〔Winnington 1959:131；呉 1962:72〕。ミャンマー側のワ族の太鼓小屋には太鼓は一つしか入っていないらしい。スコットとハーディマンは次のように記している〔Scott and Hardiman 1990:502〕。

---

\* 東京女子大学

<sup>1)</sup> ワ族の割目太鼓をアッサム、インドネシア、メラネシアのものと、ことにその首狩、鼓曳き儀礼、牛類供犠、祖先崇拜に関して、詳細な比較が必要である。私は、この論文を執筆した当時、この比較を別の機会に試みるつもりであったが、遂に行なわないうでしまった。

この「精霊小屋」の中央に村の太鼓〔単鼓〕がある。巨大な材木で、その全長の4分の3ほどの細長い裂目が縦につけられ、この裂目を通して内部が苦勞して空洞になるように彫られてあった。これらの太鼓は時には長さ10ないし12フィート、太さ3.5フィートもある。

プレスルはウ・レン (Ou Leng) 村に孤立して立つ太鼓について報じている [Prestre 1946:116] が、他方では彼はワ・パー (Oua Pah) 群の聖なる居屋における諸太鼓について語っている [Prestre 1946:181]。中国・ミャンマー国境地帯のワ・パー群に、ビルマ側のワ族よりも中国側のワ族により密接な関係があるように見える。

太鼓を彫りくぼめる技術に関しては、プレスルからカウフマン (H.E.Kauffmann) に宛てた私信 (1951年5月13日付) 中の短い一節で、火の使用が言及されている以外には何も報告されていない。この情報は若干の保留が必要であろう。と言うのは、アッサムのアオ・ナガ族は彼らの巨大な材木太鼓を彫りくぼめるのに決して火を使わないからだ [Mills 1926:96]。またコンヤク・ナガ族も使わない。カウフマンによれば、コンヤク・ナガ族地域では、材木太鼓にも、棺にも、また何にしても、木材加工には火は決して用いられないのである。この目的のための道具はもっぱら山刀 (dao) とチョーナなのである [Kauffmann 1939:230]。プレスルを信用すれば、ここにワ族とナガ族との間に彫りくぼめ法の相違があることになる。しかし、この問題は未決のままにしておくほうが安全であろう。と言うのは、プレスルの情報は確実とは思わず、また彼が実際観察したところに基づいているように見えないからである。

中国側のワ族の太鼓は二人の男が叩く。撥は米搗きの杵とほぼ同じ長さの約1.8メートルである。一對の太鼓に対する四本の撥は、長さがそれぞれ違っている。したがって、叩くとき四つの違う高さの音ができる。叩き手は右手に撥をもつ一方、左手には一片の竹をもって拍子をとる (この竹も撥であろうか?)。呉によれば、叩き手は疲れると別の者に交替する。一對の撥は、使用しないときに太鼓から吊しておく。スコットとハーディマンは、ミャンマー側のワ族の撥は木製だと報じている。

木鼓を叩くのは重要な機会においてのみであって、それは重要な祭宴、儀礼 (狩った首の祓い、牛類供犠と人身供犠)、戦争舞踏、それに村民の全体集会である。さまざまな「鼓典」つまり太鼓コードが、さまざまな出来事を知らせるのに用いられる。それは勝利の祝宴、吉兆の祝い、善い精霊の歓迎、悪霊の追放、死の哀悼である [安 1955:124-125; 黄・葉 1958:71; 凌 1953:4; Scott and Hardiman 1900:502; 呉

1962:72, 92, 153, 238, 241, 323]。

村人を呼び集めるために太鼓を叩くと、皆は狂ったように叫びながらやってくる。人間の金切声に混る太鼓の音は、何キロメートル先からでも聞こえる。

太鼓小屋は、聖域であるばかりでなく、村の会議が開かれる場所でもある。木鼓は精霊崇拝のための楽器であるばかりでなく、重要な通信を発する手段でもある。したがって、特別な場合を除いては、太鼓を叩くことは厳しく禁ぜられている。中国側のワ族は、太鼓は聖なる目的にだけ使うものとみなしている [安 1955:124 ; 黄・葉 1958:67 ; 凌 1953:4 ; なお Scott and Hardiman 1900:502-503 参照]。

一年に一回、播種の前に太鼓を聖別するために牛を刺し殺す儀式が行われる。太鼓は毎年かそれとも3年か4年に一回変えなくてはならない。全村の男が新しく作った太鼓を山から引きおろす。これは「接鼓節」つまり太鼓曳き儀式と呼ばれる。それに引き続き数日間全村は祝い、少年少女は昼も夜も歌い踊る [黄・葉 1958:67]。

接鼓節は、以下のように凌が詳しく記述している。

新しい村を建てる時、村人たちは村の門や住居を建てた後に一軒の太鼓小屋をつくらなくてはならない。これは中国側のワ族にとって大きな祭りであって、中国語で拉木鼓と呼ばれる。

村長は村の富裕な一家族を指名して他の家族を指導してこの儀式をとり行わせる。そこでこの豊かな家族の家長は、この儀礼の長と呼ばれる。多数の牛類が、この祭りを祝うのに用いられる。大きな富んだ村では、この儀式のために30匹から40匹もの牛を殺すことがある。したがって牛を買うのが一番重要な準備である。村の各家族は争って儀礼長を助けて集金する。あるものはもっと直接的な仕方で準備を助ける。つまり牛を儀礼長に贈るのである。大きな雄牛が、この儀式にもっともふさわしいとして選ばれる。一番よいのは、生まれつき角が長くて平たくて真直ぐな牛である。黄牛の場合は、大小雌雄を問わない。儀礼長が必要な牛類を集めた後、彼は全村の人々を一回、彼の家に来て飲食するように招く。この宴に加わる人はみな、太鼓によい大きな木がどこにあるのか報告する義務がある。その木には折れた枝があってはならず、完全に良い形をしていなくてはならない。この報告を聞いた後、儀礼長は二本の完全な形をした大木を選ぶ。

次に六人の男は、それぞれ三人で二組になるように頼むが、どの群にも呪文を唱えるのが上手な祭司が一人含まれている。各群はその選ばれた大木のところに行くが、弁当と炙った鼠と一瓶の酒をもって行く。数日旅をすることになってもそれを

物ともしない。

目的地に到着すると、この木の三面から上層の樹皮をナイフで剥がすことから仕事が始まる。樹皮片は地上に敷かれる。それから鼠の鼻面、前脚、後脚、尻尾が切り落され、三片の樹皮の上に置かれる。その上に酒を少々かける。祭司は木に向かって祈る。

「どうか村にやって来て鎮座して下さい。全村を平和に保って下さい。私たちは貴方に牛類、豚、鶏などを捧げてお祈りします。」

祈禱の後、彼らは酒を飲み、米と鼠を食べる。それから彼らは三片の樹皮をもって村に帰り、それを儀礼長に渡す。

儀礼長は樹皮を受け取ると、一羽の小さな鶏を用意する。次に祭司に向かって片手に鶏を、もう一方の手で三片の樹皮を持つように頼む。祈禱の後、鶏を殺して、それで占いをする。祭司は鶏から一対の脚の骨を取り、肉を完全に除去する。片方の骨はこの儀式的対立者、もう一方の骨は儀式を催す者自身を表している。小さな鋭い竹片が鶏骨の小孔にさし込まれる。味方の骨にさし込まれた竹片の数が、敵の骨にさし込まれたものよりも多いときに、疑惑がある。二本の木とも凶兆の場合には、全く別の木を新たに選ばなくてはならない。もしも一本だけが悪いときは、その代りにもう一本の木を探さなくてはならない。

もしも吉兆の場合には、彼らはこれらの木を切り倒す日を決める。彼らは近所の村々の親しい友人にこれを知らせる。友人たちはみな、鶏、木、塩などを贈物としてもって来る。

木を切り倒す一行が出発する前に、儀礼長は最初の牛を屠る。ワ族は梭のような形をした短刀で右側から牛を刺し殺す（人が死んだ場合は、牛は左側から刺し殺す）。もしも牛が傷口を上にして倒れると縁起がよい。祭司は刀で牛の尻尾を切り取る。この場合、切断は一刀のもとになされねばならない。さもないと、儀礼長に不利なことになり、彼に精霊たちを祀って凶兆をはらう。

尻尾が切り落されるや否や、祭司は尻尾から滴る血を飲み、尻尾を儀礼長に廻して、血をすすらせる。尻尾が切り落された後、列席の男性たちはみな刀を抜き、あるいは槍をかざして死体の肉を切り刻む。僅かのうちに、糞のつまった大腸までもが奪い去られる。

最初の動物が殺されたとき、肉はいつも決ったやり方で切られ、奪い去られる。肉は裸火で焼いて食べ、予め水で洗ったり、乾したりすることはない。

それから儀礼長は二匹目の牛を殺す。この肉は木を切る一行に分配し、途中で食

べるようにする。

さて一行は一列縦隊に並ぶ。男たちは槍や刀をもち、盛装した女たちは食料をもつ。木に到着すると、一行はこの木を根元で刀を使って伐り倒す。もしも木が倒れるとき、根元で折れなかったり、幹が割れたりすると、これは不吉である。その場合、一行はこの木を放棄しなくてはならない。しかし、木が根元で綺麗に切れることが多い。

伐り倒された木は、下から二メートルくらいのところを籐紐で縛られる。男女は歌いながら木を曳く。もし道が一日行程以上であっても、村に比較的近い場合は、男女は夜に村に帰る。もしも、もっと遠いときは、彼らは野営して翌日木曳きを続ける。村のはずれに達すると、一行は一夜そこで明かして、翌日に村に木を曳き込まなくてはならない。

それから彼らは村人たちを呼んで太鼓を掘りこぼめさせる。ほりくぼめる過程で、彼らは製作中途の二個の太鼓を撥で叩いてみて、二つの調子を合わせる。掘りくぼめには二、三日かかる。太鼓が完成する前に、村の働き手たちも他の村の友人たちも、村から外に出ることは許されない。

太鼓の完成を祝って、儀礼長は一匹の牛を棒で殺す。太鼓が完成するや否や、それら二個の太鼓は太鼓小屋の中に運び込まれる。村長は一匹の黄犬と一羽の鶏を殺す。犬の頭は一つの太鼓の上に置かれ、鶏の血は太鼓の上かけられる。犬の肉は村長の家族と親族の間で分配される。すると儀礼が終わったものと見なされる。儀礼長は牛肉を親しい友人たちに贈る。それから一行は解散する。

ワ族は毎年、狩った首を祝うとはいえ、それがいつも繁栄を保証するとは限らない。疫病があつたり凶作が続く場合には、彼らは太鼓が悪いのだと考える。その場合、村長は太鼓を新しいものに代えようと提案する。新しい太鼓を曳いてくる方法は、上述のものと同じである。新しい太鼓が作られると、使用済みの太鼓は太鼓小屋から出して、野外に捨て、そこで朽ちるのに委ねられる。

新しい太鼓が太鼓小屋に据えられると、一度首狩を行って、太鼓の据えつけを聖化する時になる。この時期に、首の必要が痛感される [凌 1953:4-5]。

このようにして、新しい太鼓の製作は首狩を行うことと密接に結びついている。材木太鼓と首狩との結びつきは、ウィントンによって次のように報告された。彼は小マサン Little Masang の村について記している。

「村の入口の外側に静寂な竹林の小さな空地がある。そこには多くの小さなトーテムポールのような彫刻した木柱が静かに朽ちて行くが、あるものは新しく、あるものは大変古い。私はこれを七十本まで数えた。——どれも人間の首が埋められた場所を示す儀式柱である。若干の古い村では、七百本ものこの種の過去のトロフィーの記念物がある。ワ族の伝承によると、一たび首が、呪術師の太鼓小屋の隣の小さな編んだ籠に、しかるべき儀式や飲み食いを伴って納められると、首はそこに二年間とどまって、豊作を確実にしなくてはならない。それから首は除去されて、村の外墓地に葬られる。薄明時には、魂の彷徨に当って通過すると不気味な場所だ」  
[Winnington 1959:161, cf 131]。

材木太鼓と首狩の間の密接な関係は、スコットとハーディマン、またプレスルも証言した。スコットとハーディマンによれば、

「この太鼓は村にとってのすべての危機と重要な瞬間に鳴らされるが、それは幸いにして首をもち帰ったとき、あるいは供犠が行われるとき、あるいは村の評議会が開かれるときである。この精霊の小屋の外で、精霊たちへの供犠が行われ、水牛、豚、犬、鶏が殺され、その血が柱やたる木や草葺き屋根に塗られ、そしてその骨は洞窟のまわりに群をなして吊される。

首をもってくるのもここである。首に屋根葺き草か、草か、バナナの葉にくるんで、籐か竹で作った籠に投げこまれ、暗い一隅に吊され、そこで時とともに成熟し、漂白されると、並木道にもって行って展示されることになる」[Scott and Hardiman 1900:503]。

プレスルは、ウ・レン Ou Leng 村における材木太鼓と首狩との関係を次のように記している。

「私たちは一緒に酒を飲み、一緒に蔓を折り、一緒にまたやり始めたが、その間にととう私たちの荷物は小径に着いた。その荷物とは太鼓のように作られた凹んだ巨大な木の幹だった。その日の残りは、これを村の門まで曳くのには私たちは曳いたり、歌ったり、飲んだりしなくてはならなかった。この瞬間は私は大変上機嫌だったので、このすべての努力をほとんど戦慄することなしに発見することができたほどだった。狩り取られた首が、門の前で、占い師によって決められた日に、村の内

に凱旋して入るのを待っていたのである。原住民たちが新しい太鼓を彼らの精霊たちに供するのは、この首に敬意を表してであった（中略）。

狩り取られた首であることを認めたとき、私はかなりの動揺をかくすのに最大の努力をした。私の新たな知人の敏感な魂を傷けないために、私は努力して彼らの喜びに加わった。しかし私はその他の酒や米の御相伴にあづかることを、精力的に拒否した。何故なら、私たちは、首という新たな会食者をもっていたからだ。そして、もちろんのことであるが、酒盃にしろ米碗にしろ、一同のなかで最初に口をつけるのは首だった。私は私の友人たちにその美味なびっくりパーティーに熱烈に感謝し、祭宴に加わるためにまた戻ってくると厳かに約束して立去った。

それは立派な宴だった。精霊の家の前の広場には焚火が二つあった。男たちの火と女たちの火である。この二つの火の間に、竹の容器に入った首があった。その前に原住民たちは米と米酒を供し、各人はまた踊りにもどる前に、ここに来てセルフサービスで飲み食した。……呪術師の家の内では、新しい太鼓の深い美しい音がナット（精霊たち）が供物を受け入れたことを知らせていた。そして竹の容器のなかの首は、それがもたらしたこの幸福すべてを、従容として見まもっていた。」

[Prestre 1946:114-116]。

これらは凌純声が拉鼓節と太鼓と首狩との関係について述べたことを、うまく補っている。プレスルは、原初の祖先の最初の首狩遠征を記念しての、三月十一日の首狩儀式の光景を記述している。それは係争地域のワ・パー Oha Pah で行われ、この儀式を通知するために太鼓が叩かれた。

「それは三月十一日で、聖なる日である。サヤ *saya*、つまり部族の大呪術師は、前兆の声を聞いた。そして吠鹿の最初の声が一日の終わりを告げたとき、大木鼓（複数）は、聖なる小屋の中で応答した。

……万事好調だ。首の祭りが始まった。首はここにあり、それぞれの祭壇の上にある。祭壇が五つあり、首が五つあり、ムフー *mouhous* が五つある。……全員が奇跡を期待して首に向かって頭を下げる。太鼓は遠い太洋の轟きを以て、これを知らせる。笛はその四つの調子でこれを訴えかける。それが聞えて来て、またやって来、波の白い泡のように澄んで軽い調子だ。ジャングルからは寄せ浪のざわめきが高まって来、それに応えるのは首狩で夫を失った女の陰鬱な歎きである。」 [Prestre 1946 : 181-182]。

全体として、材木太鼓と首狩とを結びつける本質的に同じ観念と儀礼が、生ワ諸群のいたるところで観察できたし、また観察されたことに何ら疑いがない。

これら儀式と同様に、太鼓は人身供犠、戦争のときにも叩かれるが、これらは人を殺す点で共通しており、恐らく首狩と共通の宗教的背景をもっているようだ。

サンヤンの村では、15歳の奴隷少年が、雨季の前のある日の暁方に、精霊たちに供犠されることになっていた。材木太鼓が叩かれ、一人の祭司が祈り、踊り、そして幾柱かの精霊の名を呼んだ。彼は米糶と、バナナの葉に包んだ茶の葉少々を精霊に捧げ、すべての方向に水をふりかけた。彼はしまいにトランスに陥った〔呉 1962:78, 92〕。

戦争を始める前に、村長は彼の助手に太鼓を打たせ、村人たちを呼び集めた。それから彼らは又になった木柱に縛りつけた一匹の牛を供犠した。もしも牛が集まった村人たちに顔を向けて倒れたならば、精霊がこの戦争に好意的で、村人に勝利を与えることを意味している〔呉 1962:238, 242〕。また戦争の間も、太鼓を打ち、牛角を吹くのである〔呉 1962:323〕。

豊作を確実にするために、人間の首を狩って、太鼓小屋に持ち込む。雨季の始めに際し、人々が洪水にならないように精霊に祈るとき、彼らは太鼓を叩き、村内のいろいろな所に焚火をたく〔呉 1962:153〕。

ワ族のところでは、材木太鼓と祖先崇拝との間の密接な関係が著しい。太鼓小屋は事実上、祖先に笹捧げられた祭壇である。ところで目立った事実には、雲南の太鼓小屋には、ふつう大小二個の材木太鼓が納められていることである。なぜ二つの太鼓なのか？たしかにこの手段によって音楽的効果が高められる。しかし私は、これには、もっと深い意味があると思っている。インドネシアとメラネシアでは、材木太鼓がしばしば祖先崇拝に用いられるが、またしばしば人格化され、人間の形をとっている〔Steinmann 1938 参照〕。これらの事情は、そこでは材木太鼓が祖先を体現していることを示唆している。この解釈はワ族の場合にも当てはまるであろう。

野生のワ族は、別稿「ワ族の人類起源神話」で詳しく論じたように〔Obayashi 1966b〕、オタマジヤクシが彼らの祖先だと称している。原初の夫婦はヤ・トームとヤ・タイと呼ばれていた。二人が蛙になったとき、丘の上に住み、生長して鬼となり、ある洞窟に定住した。この洞窟から食物を求めて二人はあらゆる方向に出撃したが、最初は鹿、猪、山羊、牛で満足していた。これが彼らの唯一の食物であった間には、二人には子供がなかった。ある日のこと、ヤ・トームとヤ・タイは例外的に遠出して、人間の住む地方にやって来た。彼らは一人を捕え、食べ、その頭蓋を洞窟にもち帰った。これ

につづいて二人には沢山の子鬼が生まれたが、みな人間の形をしていた。そこで両親はあの人間の頭蓋を崇拜するために柱の上にのせた。ヤ・トームとヤ・タイは、子供たちに、彼らの集落のなかにいつも人間の頭蓋があるようにせよと教えた。この方策をとらないと、平和も豊富も繁栄も、安寧も娯楽もあり得ないだろうというので、この教訓は常に敬虔に守られた。尊敬すべき鬼夫婦は彼らの死期の迫ったことを感ずると、子孫を呼び集め、彼らの起源を語り、ヤ・トームとヤ・タイの二人を父母の精霊として崇拜すべきだと言った〔Scott and Hardiman 1900:496; Scott 1918:293-294; cf.Pitchford 1937:223; Prestre 1946:177-178〕(なお、ボルネオのセボップ族の首狩起源神話〔Hose and Macdougall 1912: II:138-139〕も参照)。

首狩は原古の殺害の神話にもとづいている〔cf.Jensen 1960:193-206, 215, 382-384; 1963:162-163, 165-166, 170-171, 322-325〕。しかし、上記のワ族の場合、最初に殺された人間がデマ神の性格をもっていたか否かは不明である。しかし最初の神話的殺害者夫婦は明らかにデマ神であった。上述のように、野生のワ族のいる村にも(ふう)大小一對の割目太鼓を収容する小屋がある。これら太鼓は変容した原初の夫婦を表わしているらしい。狩り取られたどの首もこの太鼓小屋の中にもち込まれなくてはならず、また新しい太鼓を聖化するために、別の首を狩らなくてはならない。この習俗は原初の祖先が示したお手本と遺言に従って首狩が行われるようになったという神話によって容易に証明できる。そしてその原初の先祖は今では聖なる太鼓の形をとって現存しているのである。

## 追記

雲南のワ族の材木太鼓については、本稿のもととなった英文論文を執筆した1960年代以降の中国の研究者による調査や報告がいろいろあるが、ここでは覃光広『中国少数民族の信仰と習俗』中の記述と李子賢の見解とを引くのとどめておきたい。

「阿佤山区に生活するワ族は、日常の用水を溪谷の泉や溪流に依存している。水が滞りなく流れるように毎年太陽暦12月に水鬼を祭り、人びとの飲料水に不自由なく、また天気が順調であるように水神の加護を祈った。水神の祭礼は、ワ族にとって年の初めの宗教祭祀であるので非常に重視された。西盟馬桑寨のワ族は、毎年、六日間かけて水鬼を祭り、竹の桶や水路の補修をしながら一年間の生産と生活のための水を確保する準備をした。

水鬼の祭りが終わると、続いて一月中に拉木鼓（木鼓作りの儀礼）をする。木鼓はワ族独特の祭祀具であり、宗教活動の中で重大な役割を果たした。通常長さ約5尺（1尺は33cm）、直径2尺の樹の幹でつくる。木鼓を打つと神霊に通ずると考えられ、戦争中に通信用具としても用いられ、日常の娯楽用の楽器としても使われた。木鼓はこのように特異な働きをするので、人びとは神秘的なものと考え、「マイルアオゴォ（梅饒格）」（木鼓神）と呼んだ。

木鼓を保存し祭るために、各村落にはみな木鼓を安置するための専用の木鼓小屋があり、同時にそこは人頭を祭る場所でもあり、およそ重大な公共的祭祀はすべて木鼓小屋で行なわれた。木鼓を作る時にはいつも、村を挙げて盛大な祭祀儀礼を行ない、巫師に鬼の儀式を頼み、牛を屠って鬼に捧げた。そのあと、青壮年男子が先を争って木鼓用として選定された大樹を伐りに行く。伐る前に当たって大樹にねらいを定めて鉄砲を2発撃ち、樹霊が驚いて逃げた後に作業を始める。伐った大樹で新しい木鼓をつくった後、巫師が主宰してそれを木鼓小屋に引いて行き安置する。

できあがった木鼓は四種類の異なる音色を発する。人びとが祭祀を行なう時、大きな棒で打つと、木鼓はドンと力強い音色を発する。この時、人びとは遠くに住んでいる神霊がこの音を聞いて供え物を取りに降りてくると考え、若い男女が歌いながら踊り神霊の機嫌を取って、豊作や人畜の平安を保護してくれるように神霊に祈る」[覃 1993（下）：29-30]。

そして李子賢は次のように述べている。

「過去においてワ族の首狩祭祀の一連の宗教活動は、そのなかに巫師によって吟誦される史詩や、講述される神話を含んでいて、これらはすべて木鼓をめぐって進行するものである。木鼓は多様な機能を有しており、首狩祭祀を除いても、戦争状態のときの警報、夜廻りから大勢で踊る舞のような娯楽に至るまで、みな木鼓を用いる。木鼓の由来は神話化されていて、木依吉神あるいは別の祖先神が、ワ族に木鼓を製作することを教えたのだという。だから拉木鼓のとき、「司崗里」を吟誦して、神をたたえ、祖先を思う情を示すのである。」[李 1990:590]。

ともに本稿には引用できなかった情報を含んでいて有益であるが、私がイェンゼンの影響下に本稿で提出したような解釈はまだ中国の、あるいはその他の国の学者から出されていないようである。旧稿が日本学の雑誌に発表されたこともあって

[Obayashi 1966a]、研究者の目に触れることが少なかったことも考えて、邦訳をこの機会に発表した次第である。

## 文 献

安 才 銘

1955 『中国少数民族風光』、香港。

呉 源 植

1962 『金色の山々』、竹内実・伊藤克（訳）、至誠堂。

Hose, C. and W. Macdougall

1912 *The Pagan Tribes of Borneo*. 2 Vols. London.

Jensen, Adolf Ellegard

1960 *Mythos un Kult bei Naturvölkern*. Zweite, bearbeitete Auflage. Studien Zur Kulturkunde, Zehnter Band. Wiesbaden: Franz steiner Verlag.

1963 *Myth and Cult among Primitive peoples*. Chicago.

Kauffmann, H.E.

1939 *Deutsche Naga-Hills-Expedition. in: Ethnologischer Anzeiger IV*, :162-167, 224-235, 318-336.

黄 少 槐・葉 永 華

1958 『我国少数民族的宗教和風俗』上、北京。

Mills, J.P.

1926 *The Ao Nagas*. London.

Obayashi, Taryo

1966a *The Wooden Slit Drum of the Wa in the Sino-Burmese Border Area*, in :*Beiträge zur Japanologie*, 3 (2) :72-88.

1966b *Anthropogenic Myths of the Wa in Northern Indo-China*, in :*Hitotsubashi Journal of Social Studies*, 3 (1) :43-66.

Pitchford, V.C.

1937 *The Wild Wa States and Lake Nawngkhio*. in: *Geographical Journal* 90, pp. 223-232.

Prestre, W.-A.

1946 *La Piste Inconnue*. Neufchatel.

李 子賢

1990 「木鼓」、中国各民族宗教与神話大詞典編審委員會（編）『中国各民族宗教和神話大詞典』590, 北京：学苑出版社。

凌 純声

1953 「雲南卡瓦族与台湾高山族的獵頭祭」『国立台湾大学考古人類学刊』2:1-9。

Scott, J.G.

1918 *Indo-Chinese. The Mythology of All Races* X II, pp. 247-357, 429-430, 448-450. Boston.

Scott, J.G. and J.P. Hardiman

1900 *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*. Pt. 1. Vol. 1. Rangoon.

Steinmann, A.

1937 Über anthropomorphe Schlitztrommeln in Indonesien. in: *Anthropos* 33, SS. 240-259.

覃 光広 他（編）

1993 『中国少数民族の信仰と習俗』下、伊藤清司（監訳）、第一書房。

Winnington, Alain

1959 *The Slaves of the Cool Mountains*. London.